

住民から見た天王洲 Tennoz as seen by residents

影山 幸一（フリーランス アートプランナー）
Koichi Kageyama, Freelance Art Planner

本発表は、東品川3丁目に暮らす62歳の住民から見た、天王洲地域（東品川2丁目, 約20ha）開発についての感想であり、期待である。1989（平成元）年、東京・港区から隣接した品川区へ家族で移り住んで以来、35年が経過しようとしている。生まれ育った東京タワーが立つ港区麻布台を都市計画によって離れることになり、28歳のときに縁のない東品川へきた。当時、東品川は準工業地帯で倉庫が多く、打ちっぱなしのゴルフ練習場がある殺風景なところだった。しかし、1992年にモノレールの「天王洲アイル駅」ができ、1996年にはJALビル（現 野村不動産天王洲）が竣工、2001年に臨海線「天王洲アイル駅」が開業すると、高層マンションが年々増えていった。

東品川3丁目と東品川2丁目は、目黒川を境に分かれており、大きく分けると3丁目は住宅地、2丁目は商業地の違いがある。東品川3丁目は、旧東海道に隣接し、住民にとって日常生活の買い物は、商店が並ぶ旧東海道沿いの店を利用することが多い。また旧東海道では「宿場祭り」が行われ、北の品川神社と南の荏原神社では「天王祭」が毎年恒例となって賑わっている。品川は歌川広重の浮世絵版画《東海道五拾三次 品川 日之出》や、鳥居清長の《美南見十二候 六月 品川の夏》にも描かれており、今も江戸時代の香りが残っている。

そのような伝統のある地域に、天王洲では新たな開発が進められており、住民として新しい風は歓迎である。クラシックな旧東海道とモダンな天王洲が連動してシナジー効果が生まれることを期待している。東京都と品川区の水と緑を生かした景観・環境の快適性（アメニティ）を整備する文化政策や、天王洲地区の地権者による「一般社団法人エリアマネジメント TENNOZ（旧天王洲総合開発協議会）」では「アートになる島、ハートのある街」というスローガンで、「まち全体がミュージアムのような天王洲アイル」を目指している。住民として、アートプランナーとしても応援していきたいと思う。

アートプランナーとは何か。今まで経験してきた事例を紹介しながら、“アート”の多様性の意義を考え、「地域とアート」というテーマで地域創造の展望を試みたい。アートによるまち起こしが世界各地で行われている中、地域特性を活かした「天王洲モデル」を打ち出すことが重要なポイント。それは自然とデジタルが共存する空間であり、古典と現代、日本と海外、住民と観光客など多種多様な人々が回遊・交流する場、人材育成や経済効果に配慮したクリエイティブな行為が日々進展する場、さらには世界に開かれた生命力溢れる安心・安全の場を永続的に構築していくことだと考えている。

【略歴】1961年東京生まれ。フリーランスアートプランナー、デジタルアーカイブ観測者。現代美術、デジタルアーカイブを基軸に企画。所属学会：アート・ドキュメンテーション学会、デジタルアーカイブ学会。全国美術館会議賛助会員。主な仕事として、編集協力＝『浦野理一監修 日本の色と紋様』（毎日新聞社,1992）、CG展企画＝「3D BRAIN CIRCUS」（三菱地所・横浜ランドマークタワーギャラリー,1994）、自主企画制作＝写真展「地平線発——21世紀の旅人たちへ」（品川・O美術館,1997）、調査編集総括＝『デジタルアーカイブ白書』（デジタルアーカイブ推進協議会,2001・2005）、美術系Webマガジン「artscape」（大日本印刷）監修／執筆（2002～）など。